

イット・ナラティヴとポストヒューマニズム

川 津 雅 江

イット・ナラティヴへの注目

イギリスでは、フランシス・コヴェントリー (Francis Coventry, 1725-54) の『チビ犬ポンペイ物語』(*The History of Pompey the Little*, 1751) 以来、モノや動物が語る物語、いわゆるイット・ナラティヴが流行し、1780年代に入る頃までにはそうした形式の本が市場を席卷し、飽和状態になっていた。それらは大人向けの本だったが、1780年に子ども向けの『シルバー・ペニー貨の冒険』(*The Adventures of a Silver Penny*) が登場すると、瞬く間に児童文学の分野でも流行るようになった。

興味深いことに、マテリアル・エコクリティシズムの旗手セラネラ・イオヴィーノ (Serenella Iovino) とセルピル・オPPERマン (Serpil Oppermann) は2012年の『エコゾン@』(*Ecozon@*) において、マテリアル・エコクリティシズムのキーワードの一つである「物質のエージェンシー」を表す文学作品の例として、このイット・ナラティヴを挙げている。

トビアス・スモレットの『原子の物語と冒険』(1769)、ジョセフ・アディソンとリチャード・スティールの『懐中時計の冒険』(1788) や『コルク抜き冒険』(1775)、チャールズ・ジョンストンの『クリサル、あるいはギニー金貨の冒険』(1760)、ドロシー・キルナーの『貸し馬車の冒険』(1781)、トマス・ブリッジスの『銀行券の冒険』(1770-71) のような作品では、事物(ズボン、銀行券、かぎタバコ入れ、本、鬘、藤製のステッキ、硬貨、帽子など)や動物(猫、愛玩犬、サル、昆虫など)が、エージェンシー力を示す中心的なキャラクターとして登場し、意識と思考さえも賦与されているようだ。それらは自分たちの物語を語る。そして興味深いことに、人間の読者に対してではなく、それらの仲間の「モノ」に対して語る。(中略) このことは、いかに物質と意味が人間と非人間、主体と客体の間の内的-活動関係を生み出す意味作用に入るかを示す明白な語りの例である。

(Iovino and Oppermann, “Material Ecocriticism” 82)

そしてイオヴィーノとオPPERマンは、同年夏の『文学・環境学際的研究』(ISLE)に発表した「マテリアル・エコクリティシズムを理論化する——ディプティック」で、マテリアル・エコクリティシズムとは、「非—人間（動物，機械，環境）のエージェンシー」や「人間の支配や言語の外のモノに対するポストヒューマニスト的関心」に我々の興味を引かせ、文化的文学的テキストの中で、いかに我々が世界と、そして言説の世界と、内的—活動する（intra-act）かを分析するものであると説明している（Iovino and Oppermann, “Theorizing” 469）。

本論では、イット・ナラティヴがマテリアル・エコクリティシズムの対象になるならば、それはポストヒューマニズムの文学作品であると言えるかどうかを検証したい。イオヴィーノとオPPERマンの上記引用では、ドロシー・キルナー（Dorothy Kilner, 1755-1836）の作品だけが子ども向けであるが、本論では特に子ども向けの動物のイット・ナラティヴに焦点を絞る。

ポストヒューマニズムの定義

ポストヒューマニズムは 20 世紀末頃から盛んに使用されるようになった批評概念である。まず、その定義を振り返ってみよう。

ロバート・ペッペレル（Robert Pepperell）は 1995 年に、それを『^マ人間の終焉』についてではなく、『^マ人間中心の』宇宙、もしくは男性中心主義的ではない言い方をすれば、『^{ヒューマン}人間中心の』宇宙についての終焉、つまり「ヒューマニズムの終焉についてである」と定義した（Pepperell 171）。

しかし、21 世紀に入ると、「ポスト」を「後の」の意味で捉えた定義は修正されるようになる。たとえば、ニール・バドミントン（Neil Badmington）は 2004 年に、アポカリプス的な「^マ人間」の終焉を指すのではないと言っているが、ジャック・デリダ（Jacques Derrida）の脱構築とジャン=フランソワ・リオタール（Jean-François Lyotard）のポストモダニズムの考えに従い、ポストヒューマニズムの「ポスト」を「ヒューマニズムの遺産からの絶対的な分断を示すもの」ではないとした（Badmington, “Theorizing” 11, 21）。バドミントンによれば、ポストヒューマニズムはむしろ「ヒューマニズムの内部で起きている批判」（原文による強調）¹ を形にすることである。

ポストヒューマニストの条件のライティングはヒューマニズムのための「書き物の墓」を形成することを求めるべきではない。むしろヒューマニズムの内部で起きている批判的実践の形態を取らねばならない。それはヒューマニストの言説の通夜

ではなく、その言説の乗り越えから成るものである。(Badmington, “Theorizing” 22)

では、ヒューマニズムとは何か。バドミントンは翌年の 2005 年に、次のように説明する。

ヒューマニズムは、「^マ人間」という者が本来事物の中心にいて、動物、機械、その他の非一人間の存在物から完全に識別されており、絶対的に知られているとともに「自分自身」にとって理解可能であり、意味と歴史の源泉であり、そして他の人間たちすべてと普遍的な本質を共有するということを主張する言説である。その上、その絶対主義的前提は、人間中心主義的言説が、人間／非一人間、自己／他者、自然的／文化的、内／外、主体／客体、我々／彼ら、ここ／あそこ、能動的／受動的、野生の／飼いならされた、のような二項対立に頼っていることを意味する。(Badmington, “Mapping” 1345)

さらに、バドミントンは、21 世紀はヒューマニズムが不確定の時代だが、まだヒューマニズムは生き残っていると言う。ポストヒューマニズムはヒューマニズム内部におこっている反ヒューマニズムとのせめぎ合いを見ることであり、それは終わりにき戦いである。

21 世紀の始まりはヒューマニズムが徹底的に不確定な状態の時機であるので、ポストヒューマン的なものとポストナチュラルなものが現在にどっと押し寄せている。(中略) ヒューマニズムはこのような変化にひょっとしたら生き残ることができないのだろうか。

そうだとも言えるし、そうでもないとも言える。ワットモアが認めているように、人の不確定性は確定性の連続した主張とともに存する。過去の二項対立は揺れ動いているが、日常の決定、前提、そして活動を告げ続けている。伝統はその脱構築とともに必然的に沈黙に陥るのではない。その音は、たとえすぐにヒューマニズムの破損から流れる他の声と不協和音をかなえようとも、今もなお届いている。そして、まさにこの矛盾した状態、人間中心的な言説がそれ自身から「揺らぐのを抑える」(Whatmore, 2002, 117 頁)と同時に激しく揺れ動くというこの奇妙なやり方と、「クリティカル・ポストヒューマニズム」(Didur, 2003)は今や果てしなく交戦しなければならないのだ。ヒューマニズムは認められてもよいが、受け入れてはいけない。どんな単純な物語も十分ではないし、どんな一つの立場も正しくはない。これは終わりではない。まだ終わりではない。(Badmington, “Mapping” 1349)

ポストヒューマニズムは特にエコクリティシズムにとって有効であると指摘されている。たとえば、ルイズ・ウェストリング (Louise Westling) は 2006 年に、ポストヒューマニズムを「テクノ／サイボーグ・ポストヒューマニズム」と「アニモット・ポストヒューマニズム」に分けた。前者は、キャサリン・N・ヘイルズ (Katherine N. Hayles) の 1999 年の書名が記すように、人間がどのようにポストヒューマンになるかに焦点を当てており、身体的限界や環境的制約からどのようにしたら逃げ出せることができるかの可能性を模索する。これに対し、後者は、エコクリティシズムにとって新しい理論の可能性になるものである。というのは、それは「我々の種を残りの生命コミュニティから引き離すために仮定されてきた境界を尋問するか削除することによって、エコシステム内の人間の場を定義する助けになる」(Westling 30) からだ。ちなみにアニモット (“animot”) とはデリダの用語からとっている。デリダは動物の多様性や人間との複雑な関係を示すために “animal” の代用語として使用した (Westling 31)。

オPPERマンは 2013 年に改めてエコクリティシズムがポストヒューマニズムの方向に向かっていることを指摘した。彼にとっても、ポストヒューマニズムは「人類のアポカリプスの終焉」を示すのではない (Oppermann, “Feminist Ecocriticism” 26)。ポストヒューマニズムとは、2010 年にイオヴィーノが提唱した「非－人間中心主義的ヒューマニズム」(“non-anthropocentric humanism”) を内包するものである。イオヴィーノは、「エコロジカルなパラダイムにおける埋もれたヒューマニズムは、実際、人間にただ単にドクマや権威からの知的な独立の感情を与えるだけではなく、その諸要素の相違に固有のコンテクストにおけるエコロジカルな相互依存にたいいてい気付かせる」と論じた (Iovino, “Ecocriticism” 32-33)。このアプローチこそポストヒューマニズムであるとオPPERマンは言う。換言すれば、それは批評理論の一つである。

ポストヒューマニズムとは、人間と非－人間の特性の境界がたえず交差し、自然とリアリティがそれらのマテリアリティと相互に関係していることを見る理論的立場のことである。批評的アプローチとして、ポストヒューマニズムはまた、ポストモダニズム、脱構築、フェミニズムやポストコロニアル研究、そして科学・テクノロジー研究に満ちた学際的視点として見なされる。(Oppermann, “Feminist Ecocriticism” 33-34 n5)

また、プラモッド・ナヤー (Pramod Nayar) は 2014 年に「ポップ・ポストヒューマニズム」と「クリティカル・ポストヒューマニズム」の二つにわけて考えた。前者はケアリー・ウルフ (Cary Wolfe) が「ヒューマニズムの強化」であると定義する「トランスヒューマニズム」(Wolfe xv) と呼ぶものに相当し、ターミネーターのように、人間にテクノロジーかバイオロジー的に何かを付け加えた「もっと早く、もっと知的で、もっと病

気にかかりにくくて長生きする人間」の実現を信じている (Nayar 6)。これに対し、後者は、「いかに機械と有機的の身体、人間と他の生命体が今や多かれ少なかれ一様に関連づけられ、相互に依存し、共一進化しているかに注意を払う」もので、「ヒューマニズムやトランスヒューマニズムの理性や合理性中心」を批判し、「生命のもっと包括的で、それ故に倫理的な理解」を提供する (Nayar 8)。

ナヤーのいうクリティカル・ポストヒューマニズムは、マテリアル・エコクリティシズムが依拠している理論家の一人カレン・バラッド (Karen Barad) の考えに似ている。バラッドは『宇宙に出会う途中』(*Meeting the Universe Halfway*, 2007) の中で、ポストヒューマニズムを「『人間』と『非-人間』の間の区別を当然視し、このおそらく固定化された生来のカテゴリーに基づいて分析することに対する拒絶を示す」ものとして用いた (Barad 32)。

以上のようにポストヒューマニズムの定義はさまざまであるが、本論では、その語を人間中心主義的ヒューマニズムの終焉を示すものとしてではなく、人間と非-人間の区別の撤廃やそれらの境界の曖昧さがあらわれていることに対して用いることにする。

子ども向けのイット・ナラティヴの寓話性

大人向けのイット・ナラティヴが大人や消費社会や階級制度を諷刺するに対し、子ども向けはジョン・ロック (John Locke, 1632-1704) の教育論に従って、子どもを楽しませながら教育するという二重の目的を持っていた。ロックが子どもに最適の本として考えたのは古代ギリシャの『イソップ物語』(*Aesop's Fables*) や中世の『レナード狐物語』(*Reynard the Fox*) のような寓話だった (Lock 119-20)。寓話における擬人化された動物は人間の振る舞いのアレゴリーや道徳的教訓の手段として使われた。子ども向けのイット・ナラティヴはその寓話の流れを引く。しかし、大人向けと違って、この物語は make-believe だということをわざわざ明記している場合が多かった。たとえば、『シルバー・ペニー貨の冒険』冒頭では、シルバー・ペニー貨が話すのは、『イソップ物語』の中で動物が「話しているふりをする」(*make believe to speak*) のと同じだと言っている (*Adventures* 1: 18)。『ネズミの生涯と漫遊』(*The Life and Perambulation of a Mouse*, 1783-84) では、著者のドロシー・キルナーは序文で、ネズミが語る話を口述筆記したと言いながら、すぐあとで「私はこれまで一度もネズミが話すのを聞いた事がない」(Kilner 1: xii) と子どもの読者に対し打ち明け、また他の箇所でも、この話は「ネズミによって語られているように見せかけ (*made believe*) ている」(1: vi), 「ネズミがもう一度私のところにやってきて、話すふりをする (*making believe*)」(2: v), 「私の小さな見せかけ (*make-believe*) のお仲間のお話」(2: 55) などと何度も述べている。こうした make-believe の強調は、動物が人間と同等であるという誤った考えを子どもに植え

付けてしまう危険性を回避するためだった。² make-believe という枠組みの設定の背後には、人間と動物との間に厳然たる境界を据えようとする人間中心主義が潜んでいると言える。

子ども向けの動物のイット・ナラティヴはまたアレゴリーを伝えるだけではなく、サラ・トリマー (Sarah Trimmer, 1741-1810) の『寓話的物語—動物の取り扱いに関して子どもの教育用』(*Fabulous Histories. Designed for the Instruction of Children, Respecting Their Treatment of Animals*, 1786) は人間のベンソン家とコマドリ一家の話を交互に描くが、後者はイット・ナラティヴ形式である。トリマーも鳥が話をするのは「リアル」ではなく、「寓話」として見なすべきであると述べている (Trimmer, *Fabulous* x-xi)。しかし、それは、「道徳的教え」をもたらすだけではなく、「同時に、非道な虐待が頻繁に加えられるあの興味深く愛嬌のある生き物に対する同情や思いやりを掻き立て、普遍的な仁愛を促す」(xi)。すなわち、イット・ナラティヴはアレゴリーだけではなく、文字通りの意味も孕むのである。フランク・パルメリ (Frank Palmeri) は、後者の意味の物語を「自己批判的寓話」(self-critical fables) と名付け、そこでは擬人化された動物は動物に対する人間の態度 (擬人化を含む) を批判すると説明している (Palmeri 84)。

実際、動物虐待反対の声は 18 世紀中期以降、文学、教育書、宗教、哲学などあらゆる分野において高まっていたが、児童書も例外ではなかった。その流れは 19 世紀になると家畜虐待防止法成立に結実し、1970 年代に現れたピーター・シンガー (Peter Singer) などの動物解放運動の先駆けになった。しかし、シンガーは動物虐待を種差別として問題視するが、18 世紀後期の児童書における動物虐待反対の言説は、動物の福祉を願うというよりも、人間の道徳的卓越を示すためであった。そのことは、『寓話的物語』のベンソン家の話において最も顕著である。³ 母親は子どもたちに自分より小さくて弱い動物に対して優しくしたり、反対に怯えたりしないように教えるが、それはキリスト教徒としての美德である仁愛と、神を頂点に、大人の人間、子ども、動物へと降りてゆく存在のヒエラルキーを知らしめるためだった。また、動物も人間と同じく痛みを感じるので動物を虐待してはいけないが、禁止されたのは「長々と」苦しみを与えることで、一撃で殺すのはよしとされた。なぜなら、動物には魂がないので、「苦しみがその命とともに終わる」(Trimmer, *Fabulous* 67) からである。このように人間の卓逸性をくずさない動物虐待反対の言説は、ゾーイ・ジャック (Zoe Jaques) が指摘するように、ヒューマニズムであって、ポストヒューマニズムではないと言えるだろう (Jaques 33)。

擬人化の語り

子ども向けの動物のイット・ナラティヴも人間中心主義のヒューマニズムの枠内で語られることが多い。トリマーのコマドリ一家の長男ロビンが怪我をして地面に落ちてしまっ

たが、それを知らない家族は必死に行方不明の長男を捜すが見つけない。そのとき、父鳥は「もしかわいそうなロビンが死んでいたら、彼はもう苦しんでいないだろう」(Trimmer, *Fabulous* 33) と他の家族を安心させる。これは、動物には人間と違って死後の世界がないことを動物自身も理解していることを示す。

しかしながら、マテリアル・クリティシズムでは、モノの擬人化は人間中心主義に反するようなモノのエージェント力を強調する語りの方策になることもある。

マテリアル・エコクリティシズムのコンテクストにおいては、モノ、場所、自然の要素、非一人間的動物の人間化は必ずしも人間中心的・ヒエラルキー的ヴィジョンのしるしではなく、物質^{マター}のエージェント力とその諸要素の水平性を強調するための語りの方策でありうる。もしこの批評の視点で捉えれば、擬人化された表象は人間と非一人間の間の類似性と対称性を示すことができる。こうして、分類別な分割を強調する代わりに、擬人化は潜在的に「人間中心主義に反対するように働く」(Bennett, *Vibrant* 120)。(Iovino and Oppermann, “Material Ecocriticism” 82)

そこで、動物の擬人化の語られ方に注目しながら、子ども向けの動物のイット・ナラティヴを読むと、すべてではないが一部の作品に、人間と動物の間の境界が曖昧なポストヒューマニズム的な表現があることに気付く。次に、その代表的な事例として二つの作品を見てみたい。

他者の苦しみの共感

まず取り上げる作品はキルナーの『ネズミの生涯と漫遊』である。主人公であるニンブルは、3匹の兄弟が母親ネズミの唯一の教え「(どんなに誘惑があろうとも) 決して同じ場所に何度も姿を現してはいけない。もしそれと逆のことをしたら、どんなにいい気になろうとも、お前たちは必ず最後には殺されるだろう」(Kilner 1: 14) に従わなかったために、それぞれ悲惨な目に遭う様を目撃し、逐一語る。これらの話はすべて親の教えに背くと子どもは罰を受けるという教訓を示している。

しかし、ニンブルが語る話はアレゴリーだけではなく文字通りの意味も含む。たとえば、ニンブルは、母の教えに背いて出かけた弟のソフトダウンが人間の乳母がしかけたネズミ取りにつかまってしまった事件を次のように語る。

それから彼女は、可哀想なソフトダウン^{ソフトダウン}が中にある箱(ボクはあとでそれがわなと呼ばれているのを知った)を持ち上げ、それを部屋の中に運んだ。ボクは最愛の弟の運命がどうなるか見るために、彼女のあとをそっとついていった。けれど、彼女

が片手でその箱をロウソクに近づけながら、もう一方の手で子どもを抱え、落ち着いた様子でその子に歌をうたい、見てごらん、ネズミ！ネズミ！だよと言っているのを見たとき、ボクの恐怖を表現できる言葉があるだろうか！

その恐ろしい瞬間の哀れなソフトダウンの行動や感情がどんなだったか、ボクにはわからない。だが、ボク自身の苦悶は（それを述べることは不可能なのだが）、彼女がわなをほとんど逆さまに振らし、それから一方の端にわなを動かすのを見る度毎に一層増していった。そのとき、可愛い生き物の尻尾が反対側の金網の間から外に出ているのが見えた。彼が彼女から逃げようとしてもがいたからだ（とボクは思う）。彼女はこうにしてしばらくの間彼を苦しめたあとようやくわなをテーブルの上においた。その場所は大きな炉火にとっても近かったので、彼はその熱にすごく困らされたに違いなかったと思う。彼女はそれから彼女の子どもの服を脱がし始めた。（Kilner 1：32-34）

その後、ニンブルは、別のネズミを捕まえるためにわなを空にしたい乳母に頼まれて、下男のジョンがソフトダウンの尻尾を紐で縛ってわなの外に出すのを目撃する。

ソフトダウンは、紐で縛られるまで辛抱強くじっと静かにしていたのだが、もはや痛みをこらえることができずに、みじめな苦悩の声をあげた。彼は小さなのででできる限り大きな音でチューチュー鳴き、同時に全力で自由になろうとした。しかし、頭を下にした状態では、救いを得ようとしても無駄だった。それに彼をつかんでいる野蛮な怪物は、彼の苦しみほんの少しの哀れみも感じていなかった。ああ！そのとき、ボクは自分自身の存在をどんなに憎んだことか。彼を救い出し、同時に彼を苦しめる者たちを容赦なく罰するに十分な大きさと力が自分に賦与されていればよかったのに。しかし、ボクの望みは効果がなく、冷酷なあいつが彼を暖炉の床に置くのを見て、言うに言われぬ苦痛を味わった。やつは良心の呵責なく彼を足で潰し、それからぞんざいに灰の中に蹴飛ばして、さあ！猫が匂いを嗅ぎ付けてやってくるぞと言ったのだ。あの怪物の足の下からソフトダウンの血が吹き出すのを見たのを思い出すとぞっとする。彼の骨がグシャと碎ける音を聞いて恐怖で立ちすくんでしまった。（Kilner 1：37-38）

ニンブルが語るソフトダウンの話は、動物虐待をしないようにという教えを含んでいる。そして乳母がネズミをローソクの近くにもって行って長々と熱にさらしていることと、下男が足でいっぺんに潰し殺したことのうちどちらがよりひどい虐待かと言えば、前にも述べたように、動物の苦しみを不必要に延ばし続けていた方である。しかし、ここで注目したいのは、人間の虐待行為がネズミ本人にとって苦痛であることを、ニンブルがソフトダ

ウンの苦しみを自分の苦しみのように感じることを通して示されていることである。ニンブルはわなにつかまったソフトダウンの「感情」がどのようなであったかはわからないと言いながら、それを「ボク自身の苦悶」として感じる。そして、わなが大きな炉火の近くのテーブルの上におかれたとき、ニンブルは「彼はその熱にすごく困らされたに違いなかったと思う。」下男がソフトダウンを足で潰したときは、「言うに言われぬ苦痛」を感じる。

こうした表現は、動物も痛みを感じることができることの例として機能するだけではない。他者の痛みを我がことの痛みのように感じることは、18世紀には人間の美徳的特性である「慈悲」(humanity)の特徴として考えられていた。1735年6月17日付けのロンドンの週二日発行の新聞『プロンプター』(*The Prompter*)第63号は、慈悲とは「聖書作家たちによって人間への善意と呼ばれ、異教徒によって博愛、もしくは同胞愛と呼ばれるもの」であり、「善良な行為に満足するだけではなく、他者の苦痛を内的な痛みで感じる」ことと定義し、それを「感受性」(*Sensibility*)と名付けている(*Prompter* 63)。

ニンブルはソフトダウンの痛みを想像し、その痛みに共感する。ニンブルはまた「最愛の弟の運命がどうなるか」見たいという好奇心、ソフトダウンが乳母から「逃げようとしてもがいている」ことやソフトダウンを掴んでいるジョンが「彼の苦しみにほんの少しの哀れみも感じていなかった」ことを推察する力、「彼を救い出し、同時に彼を苦しめる者たちを容赦なく罰するに十分な大きさと力が自分に賦与されていればよかったのに」という願望、そしてこのエピソードを語るための記憶力も持っている。こうした語りの方法は、人間と動物の境界を崩すポストヒューマニズム的側面を示していると言ってもよいだろう。

博物学に基づく人間と動物の類似

ニンブルの語りは、ネズミが感情だけではなく、想像力、推察力、推察力、記憶力も持っていることが示されるが、それらの能力が言葉話すことと同じくすべて make-believe であるのかどうかは曖昧なままである。しかし、18世紀末に近づくにつれ、動物のイット・ナラティヴは、寓話やアレゴリーよりも動物の自然な描写がより好まれ、人間の「同胞」としての動物の位置づけが目立つようになっていった。トリマーは、それらの物語における動物への慈悲が「あたかも私たちと同じ種であるかのように」極端であることを批判し、「子どもたちに〔人間と動物の間に〕適切な区別をすることを教えること」の重要性を説いたが(Trimmer, *Guardian* 2: 185)、逆に言えば、人間と動物を同等に扱う傾向に向かったと言える。そこで、最後にその代表的な作家としてエドワード・オーガスタス・ケンダル(Edward Augustus Kendall, c. 1776-1842)の『ツバメ』(*The Swallow*, 1800)を考察したい。

この作品は、トリマーの『寓話的物語』のように、人間の話とイット・ナラティヴ形式の動物の話が交互に構成されている。ケンダルも序文において、「教育と娯楽」のために

動物に「その本領では無用な能力」（すなわち、人間の言葉を話す能力）を帰したが、ここでは「身体的真実性が侵害されている」と認めた（Kendall xiii）。しかし、次のように、動物を虐待から守るために実際の動物そのままの性質を表現したことを強調する。

主として動物をその本当の性質（ある程度の知覚や記憶、そして概念を比較し、その結果行動する能力を備えた性質）で提示することによって、口のきけないものにとっての声になることによって、著者はそれら〔動物〕の利益を促進したいと思う。そしてこのように虐待する気性の者への開口部をすべて閉ざすことによって、人類に貢献したいと思う。（Kendall xiv）

換言すれば、動物が言葉を話すのは空想だが、動物の「ある程度の知覚や記憶、そして概念を比較し、その結果行動する能力を備えた性質」は真実なのである。

本文の中では、動物の「本当の性質」が博物学に裏付けされたものであることが明らかにされる。たとえば、ツバメが巣をつくる場所によって雨よけの覆いをかけるなどの描写のとき、フランスの博物学者ビュッフォン（Comte de Buffon, 1707-88）の『博物誌』（*Histoire Naturelle*）から、「この場合、本能は理性にほとんど類似しているように示される。それは少なくとも二つの観念の比較を前提としているからである。この小さい種〔ツバメ〕には多様な習慣があり、他のほとんどの鳥よりもさまざまな、そして完璧な本能がある」（Kendall 17-18）などの箇所を引用する。また、スコットランドの博物学者ウィリアム・スメリー（William Smellie, 1740-95）の『自然史哲学』（*Philosophy of Natural History*, 1790）に依拠しながら、人間は他の動物のかしらであるけれども、動物は「自然に授けられた知力」によって、「人類の賢人や天才に多少とも近づくか、あるいはそれから退くかのところにいる。すべてが漸次的段階の知性である」と述べている（Kendall 21）。つまり、動物の知力は人間より劣っているだけであり、まったくないとは言えないのである。

ケンダルは、動物と人間の間の部分的でも類似性を認めることが、動物に対する「共感」をもたらすと考えた。

このように動物を表すことによって、主たる困難さ、すなわち異なった種の生き物が部分的に同じ見解と興味を持っていることを〔人の〕知性に思い出させるという困難さは事前に除去される。これが一旦確立されると、そのときまで行動することを許されていなかった自然は、道徳哲学者が心の共感を主張するのに手を貸すだろう。（Kendall xv-xvi）

それでは、ツバメの話でどのように動物と人間の類似性が表現されているのだろうか。

一例として、人間の家の窓につくった巣の中のヒナを下男のトムに盗まれたツバメの両親の話を見てみよう。母鳥は餌を取りに出かけていたので、巣には父鳥とヒナだけがいた。

トムの手からあわてふためいて本能的に逃げたイワツバメは、すぐあとで巣を守るために戻ってきた。壊れた壁を見つけ、強奪がなされたことを知るや否や、小鳥は一瞬あらゆる感覚と記憶を失った。さっと飛び去って、かん高い鳴き声をあげながら家の周りをすれすれに飛び、そして壊れた巣に戻って窓にぶつかり、住むのに適さない屋根に復讐した。「愚かな鳥だ」と彼は叫んだ。「お前はあなたの運命に値する！お前はこれまで繰り返し災難にあっているのに、人間に近づかないように用心しなかったのか。なぜ不誠実で偽りの笑顔を見せる人間の近所より、吹きさらしで嵐が叩きつける岩、不毛な山の荒々しく風の吹く頂上を選ぼうとしなかったのか。」今や、彼は猛スピードで離れ、母鳥に災難が起こったことを知らせようと急いだ。しかし、すぐ夢を見ていると思い始め、事実を確認しに急いで戻った。ヒナたちに大声で呼びかけるが答えはなかった。彼は壁に衝突し、破壊された巣の最後の愛しい遺物にしがみつき、大きな鳴き声を上げた。世話してきたヒナをもう一度自分のところに戻してくれるように盗人に懇願し、ありったけの優しさ、ありったけの寛大さ、敬虔さ、ありったけの施しの栄誉、そして祝福の至福で、自分のもとから奪われた無力な生き物たちにただ会わせてくれと盗人に嘆願した。それから、母鳥を捜しにふたたび出発した。彼女が食料を持ってすーと飛んでいるのを見たが、話をするのが怖くて、特にヒナたちを見捨てたことを恥じて（だが、他にどうすることができただろうか）、彼は反対方向に飛び、彼女が通り過ぎる間身を隠した。（Kendall 23-25）

一方、母鳥の様子は以下である。

母鳥は、たくさんの上等の獲物を集めたので喜びながら、そして彼女の到着で喜びがみんなに行き渡るのを予想しながら、楽しげにさえずりつつ飛んでいった。（中略）彼女は一つの窓に目を定めて、そちらへコースを進める。すでに懸念が彼女の心をつかむ。彼女の住まいの普通でない様子、喜びのない沈黙——チュッチュッ鳴く声で迎えてもくれず、どんな頭も覗いていない！ああ！彼女はあまりにもたやすく破壊が起こったことを推量する。彼女は近づき、すべてを発見する。そして羽を制御することがほとんどできずに、羽ばたきし、近くのわらぶき屋根に落ちる。（Kendall 26-27）

父鳥は巣が壊され、ヒナが全部いなくなったのを知ったとき、「あらゆる感覚と記憶」

を一瞬失い、うろたえて何度も壊れた巣の周りをとび、何故人間の家に巣をつくったのかと自責し、いやそれは夢だと思い直したり、巣泥棒にヒナを返してくれと嘆願したり、母鳥に対して会いにいこうとするが恐れと恥の感情に捕われる。また母鳥はヒナたちの喜びを「予想」しながら餌取りから巣へ帰るが、尋常でない巣の様子に「懸念」を抱き、すぐさまその原因を「推量」する。これらは、ツバメが人間と同じくさまざまな感情を持っているだけではなく、外的事物の認知能力や反省、自己批判、推測などの思考能力もあることを示している。

ケンダルの『ツバメ』における擬人化された動物は、キルナーの『ネズミの生涯と漫遊』と違って、寓話的意味をもはや持っていない。当時の博物学に基づく動物の特性の描写は程度の差があれ文字通り人間のそれに類似しており、人間と動物の境界の完全なる崩壊を予期する。ケンダルはこうしたポストヒューマニズム的な動物と人間の関係に気付かせることによって、子どもの読者が種を超えて動物の主体的な行動を経験し、動物の苦しみを自ら感じとり、その結果、動物に対して残酷な扱いをしなくなることを期待したのである。

* 本論は JSPS 科研費 15H03189 の助成を受けている。

注

1. 本論では、以下同様に、引用の強調は原文による。
2. たとえば、ジョン・マーチャント (John Marchant, fl. 1750) は 18 世紀半ばに、寓話による教育の危険性について次の警鐘を鳴らしていた。「物語が本当であると子どもが信じるがありうると想定したら、その子は同時に動物に理性と理解力が賦与されていると信じるに違いない。それは若い心に動物が人間と同等であるという誤った概念を持たせることになる」(Marchant iv)。
3. 『寓話的物語』における動物虐待反対の言説に関して、詳しくは川津参照。

引用文献

- The Adventures of a Silver Penny*. London: W. Nicholl, [1780]. *British It-Narratives, 1750-1830*. Gen. ed. Mark Blackwell. 4 vols. London: Pickering, 2012. 1: 18-29.
- Badmington, Neil. "Mapping Posthumanism." *Environment and Planning A* 36.8 (2004): 1344-63.
- . "Theorizing Posthumanism." *Cultural Critique* 53 (Winter 2003): 10-27.
- Barad, Karen. *Meeting the Universe Halfway: Quantum Physics and the Entanglement of Matter and Meaning*. Durham and London: Duke UP, 2007.
- Bennett, Jane. *Vibrant Matter: The Political Ecology of Things*. Durham: Duke UP, 2010.
- Didur, Jill. "Re-Embodying Technoscientific Fantasies: Posthumanism, Genetically Modified Foods, and the Colonization of Life." *Cultural Critiques* 53 (Winter 2003): 98-115.
- Hayles, N. Katherine. *How We Became Posthuman: Virtual Bodies in Cybernetics, Literature, and Infor-*

- matics*. Chicago and London: U of Chicago P, 1999.
- Iovino, Serenella. "Ecocriticism and a Non-Anthropocentric Humanism: Reflections on Local Natures and Global Responsibilities." *Local Natures, Global Responsibilities: Ecocritical Perspectives on the New English Literatures*. Ed. Laurenz Volkmann, Nancy Grimm, Ines Detmers, and Katrin Thomson. Amsterdam: Rodopi, 2010. 29-53.
- Iovino, Serenella, and Serpil Oppermann. "Material Ecocriticism: Materiality, Agency, and Models of Narrativity." *Ecozon@3.1* (2012): 75-91.
- . "Theorizing Material Ecocriticism: A Diptych." *ISLE: Interdisciplinary Studies in Literature and Environment* 19.3 (Summer 2012): 448-75.
- Jaques, Zoe. *Children's Literature and the Posthuman: Animal, Environment, Cyborg*. New York and London: Routledge, 2014.
- [Kendall, Edward Augustus.] *The Swallow: A Fiction. Interspersed with Poetry*. London: E. Newbery, 1800.
- [Kilner, Dorothy.] *The Life and Perambulation of a Mouse*. 2 vols. 1783-84. London: John Marshall, [1790].
- Locke, John. *Some Thoughts Concerning Education*. Ed. John W. and Jean S. Yolton. Oxford: Clarendon, 1989.
- Marchant, John. *Puerilia; or, Amusements for the Young, Consisting of a Collection of Songs*. London: P. Stevens, 1751.
- Nayar, Pramod K. *Posthumanism*. Cambridge: Polity Press, 2014.
- Oppermann, Serpil. "Feminist Ecocriticism: A Posthumanist Direction in Ecocritical Trajectory." *International Perspectives in Feminist Ecocriticism*. Ed. Greta Gaard, Simon C. Estok, and Serpil Oppermann. New York and London: Routledge, 2013. 19-36.
- Palmeri, Frank. *Humans and Other Animals in Eighteenth-Century British Culture: Representation, Hybridity, Ethics*. Aldershot: Ashgate, 2006.
- Pepperell, Robert. *The Posthuman Condition: Consciousness Beyond The Brain*. Bristol: Intellect, 1995.
- The Promper* 63. Tuesday, June 17, 1735.
- Trimmer, Sarah. *Fabulous Histories. Designed for the Instruction of Children, Respecting Their Treatment of Animals*. London: T. Longman, and G. G. J. and J. Robinson, and J. Johnson, 1786.
- . *The Guardian of Education, A Periodical Works*. 5 vols. Bristol: Thoemmes Press; Tokyo: Edition Synapse, 2002.
- Westling, Louise. "Literature, the Environment, and the Question of the Posthuman." *Nature in Literary and Cultural Studies: Transatlantic Conversations on Ecocriticism*. Ed. Catrin Gersdorf and Sylvia Myer. Amsterdam: Rodopi, 2006. 25-47.
- Whatmore, S. *Hybrid Geographies: Nature, Cultures, Spaces*. London: Sage, 2002.
- 川津雅江「感受性の規制——サラ・トリマーの動物愛護教育」、『十八世紀イギリス文学研究——第5号共鳴する言葉と世界』。日本ジョンソン協会編、開拓社、2014、200-15。

(名古屋経済大学名誉教授・イギリス文学・文化)

